

「私に従ってきなさい」－マタイによる福音書講解説教 72－

詩篇 第62章 9節～12節
マタイによる福音書 第16章 21節～28節

説教 岡村 恒 牧師

「わたしに従ってきなさい」(24節)と主イエスは私たちを招いてくださいます。主イエスのすぐ後ろについて行き、私たちが主イエスと共に歩み、共に生きるようになるためです。

「あなたこそ生ける神の子キリストです」、ペテロの口からこの信仰の告白が響き出たすぐ後の出来事です。この告白を受け取って主イエスは、これからご自分がどういう道を進んで、私たちの救いを成就してくださるのかお語りになりました。「必ず…苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえるべきこと…」(21節)です。

神の国について語ってこられた主イエスは、ここに来て、十字架を前にして神の御計画を公表なさったのです。御自身が、神の救いの計画の最も重要なお方として組み込まれ、一切をこの計画にお委ねになって歩んでいかれます。神は、主イエス・キリストを十字架にかけて死に引き渡す、という仕方人間をお救いになると決定されました。これこそ、主がこの世に来られた目的でした。

しかし、神の救いの計画を聞かされた弟子たちは受け入れることができませんでした。あの信仰の告白をしたペテロが「イエスをわきへ引き寄せて、いさめはじめ、『主よ、とんでもないことです。そんなことがあるはずはございません』と言いました(22節)。神の救いの計画を聞いて、それを阻止しようとする人間の罪の姿がここにあります。

わきへ引き寄せていさめる、指導するというのは、弟子が師に対してとる態度ではありません。〈いさめ〉たとは、主イエスが汚れた霊を叱責された時(マルコによる福音書 1章25節)や、嵐を叱り付けられた時(マタイによる福音書 8章26節)に用いられているのと同じ言葉です。神の救いの業を『阻止』しようとする人間の企てです。自分が期待した救いとは違う仕方で、人間を救おうと決心された神のみ業を、人間は阻止しようとはします。

このペテロに向かって主は「サタンよ、引き下がれ」(23節)、主は『私の前に立つな!』と厳しく叱責されました。私たちの罪とは、結局主の前に立つ、自分を主イエスの前に置いてしまうことです。ペテロが主の前で犯した過ち、私たち人間が神の前で犯す過ちは、いつもこのように主イエスの前に立ちただけ、救いの満

業が進んでいくのを阻もうとそするのです。

神のことではなく、人のことを思っているとお叱りになった主イエスは、群集をみもとに呼び寄せて、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。」(24節)と言われました。自分を「捨てる」とは、自分に対して『否!』と言うことであり、自分の思いや計画の中ではなく、神の計画の中で生きることを意味します。自分を殺す道具である十字架を運んで、主イエスはゴルゴタの丘へと歩まれました。主は私たちにも「自分の十字架を負うて」歩んだら良いといわれます。自分を滅ぼす罪のしるしに目をとめ、その罪の重荷を確認しながら、主の後ろに従って行けばよいのです。「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見出す」(25節)からです。

また、〈自分の十字架を負うて〉(24節)という生き方に、後戻りはありません。しかし主に従い、神の救いの計画に全てを委ねて生きると、命を手ににぎりしめることになります。ここでは命という言葉が繰り返されています。本当の命は、救うか失うかの2つに1つであり、中間などないと主は言われます。そして、失う命はなにものをもってしても買い戻すことは出来ません。ただ、唯一の代価、それは全世界と比べてもなお重い主イエスの命です。

だから、命の問題を語る時に、主イエスは繰り返し、主イエスとの関わりを問題にされます。「わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだす」(25節)のです。主を信じる、主が私の身代わりとなって、全世界よりも重いその命を、私の代価として支払って下さったお方だと信じる時、私たちは初めて自分自身の命を発見するのです。

この計画を信じて、主を信じて生きたら良いのです。それぞれに与えられた負うべき重荷を喜んで負い、共に歩んで下さり行くべき道を示してくださる主のみあとに従って行けば良いのです。あなたこそキリストですと繰り返し告白して歩みましょう。主が私の代価を払って下さり、私たちの命は既に主によって買い戻されたからです。そして私たちは神の救いの計画の中を歩んで行くのです

(記 岡村 恒)